

六 花 3



俳句雑誌りっか
2017 (平成29年)
cover design Yuna Mizuno

山田六甲

氷 柱

かん
間

淡海へとそぞろ心や迷ひ鶴
畦焼の号令を待つ火種かな
鯉跳ねて木の芽起こしにかかりけり
けとぼしは寒さしのぎによかばつてん
文出さず悴む指に墨すつて
すずめ来て屋根ほがらかや寒もどり
立春大吉猫のおしりに火がついて
太箸をいまだ使うて寒に耐ふ
梅が香や鬼房ほどの死後もなく
奥の院仏は耳に氷柱して

福はうち鬼はうちどすほつちつち
菜箸に寒のもろこのあぶらかな
山水の涸れず流れず春そこに
夢に人追ひぬるごとし麦踏は
湖北にて鶴をみし夢さめやらず
枯ひばり父になるべく戦へる
冴返る出汁のにほひにたちどまり
水盤に寒の椿の回りそむ
凍土の陶工の手にさからはず

楳の宿丸木に斧の打ち込まれ
埋火のほのかに村の眠りけり
笹鳴や奥の院へと石しるべ
冬鴟の選りし高枝けぶりけり
湯気溢る南京町に年惜しむ
電飾の試験点灯風花す
わが影を揺らしてみたる日向ぼこ
忘年のふたりの吾子も揃ひけり
子芋煮る母の一句に孫のこと
けんけんぱ秋夕焼のけんぱつぱ

玉葱の苗立ちあがる冬の雨

升田ヤス子

玉葱の苗立ちあがる冬の雨

新藁やふたたび稲架に戻されて

蛾の飛ぶと見れば大豆の扱かれをり

大綿や放哉の居の水場より

金婚や夫の手酌の生姜酒

たまねぎのなえたちあがるふゆのあめ　ますだやすこ

玉葱の植え付けは十月から十二月頃。植え付けるときの苗は浅葱色（あさぎいろ）で細くなよなよとしている。物を枯らすはずの冷たい雨なのに弱々しい苗が勢いを取り戻し、目の前で伸び立ち上がるようにさえ思える。いよいよ成長の一步に入ったのだ。物の強い生命力を捉えた写生句。

六甲

土鍋屋の階段せまし年忘れ

藤生不二男

口数のへたつてきたる日向ぼこ

けものらにやがて時雨れてきたりけり

元町を素通りしたる師走かな

土鍋屋の階段せまし年忘れ

たえまなく櫛落葉の広ごれり

どなべやのかいだんせましとしわすれ ふじおふじお

「確かに」と相づちを打ちたくなる。階段は狭く急で、肩が綿壁に触れそうだ。見上げるとすれ違えない客が上る客を待っている。土鍋屋らしい情緒があった。そういう小料理屋の忘年会も昭和と共に姿を消したのだからか。土鍋屋と狭い階段は時代の情緒。

六甲

凧のしんにさびしきとき止みぬ

善野 焔

こがらしのしんにさびしきときやみぬ ぜんのろう

寒鏡伯母の手に梳く祖母の髪
寒潮を見やりて丘を去りがたし
明石崎寒ざむ灯り夕間暮
凧のしんにさびしきとき止みぬ
忘年や上手に酔うて帰るべし

凧に心が揺さぶられ、淋しさをつのらす。淋しさが極まってもう絶えきれないと思ったとき、凧はぴたりと止んでくれたが、淋しさの極みを作者に押しつけて去った。凧に肩すかしを食った空虚な瞬間で一番精神的に打撃を受ける反面、凧に助けられたようなところもある。

六甲

雪卿集

秋深し

志方 章子

日差しはまだ豊かなるとも秋深し
野点傘すこし斜めや初紅葉
百歳の宮の御薨去夕紅葉
そぞろ寒最終便の渡し舟
身じろげず秋夕焼けの消ゆるまで

犬の声

出口

誠

犬の声秋の夜空にひびきけり
山麓を真白に染めて冬の霧
冬の朝がれきの山とシヨベルカー
冬の夜肩まで風呂に沈めけり
こたつから出るきつかけのお客さん

雪卿集

猪の罾

升田ヤス子

初 鴟や 楔あらたに 畑搔けば
楓かな 鞠の懸りにも みづりて
千屈菜を 隅に咲かせて ほまち畑
鯖 鮪の 木 杵洗へり 在祭
竹やぶの 風のよどめる 猪の罾

初しぐれ

藤生不二男

工房に 籤削ぐ音や 初しぐれ
獣らに やがてしぐれて きたりけり
来し方にとどまり ぬたる冬日かな
さだめなら 従ふことも 根深汁
番傘を 提げて見やりし 冬田かな

雪樹集

笹の雪
田尻勝子

チューリップ二十個孕むプランター
風の来て笹の雪爆ぜ爽然と
十四畳に白梅古木影のあり
春蝶の海に出でたる舞子浜
シイインと車近づく寒の入り

冬の虹
住田千代子

輝きの途切れなく散る銀杏かな
黒雲の間美しき冬の虹
マフラーを巻きつつ駅へ急ぎけり
花束の崩れて帰る忘年会
白鳥の大きく靄の上がりけり

雪樹集

年忘れ

廣畑 育子

凧の中に見紛ふ友の顔
三界に家無き女年忘
一枝の紅葉を残す古木かな
青空の筒抜けなりぬ冬桜
野路菊や馬の背山の伝ひ道

暦果つ

赤松有馬守破天龍正義

花びらにパーマ掛かりて菊咲けり
弟子敬ふ師の一句有り冬隣
身の上を尋ねをんなと年忘れ
聖夜かな七面鳥の食ひ残し
悔ひなどは毛ほども無しや暦果つ

蛍雪譚

六甲選

二十九年三月号鑑賞と随想

俳句で人が育っていくには、育つ環境が大切。切磋琢磨と協力とが必要で矛盾したようなことが起きてくる。

また、どこまで師匠を信じて二筋の道を貫くかによる。

師匠は信じてもらわなくてはいけないから、弟子の三倍は精進しなければいけない。幸い六花には人を蹴落とそうなどという者はおらず、仲がいい。そこには妬みなど起きず、自らは自らの腕を磨く。佳いことには心から佳いと言える。こういう人たちを育て、必ず俳句をしていて、人生が豊かになった、と喜んで頂く。そのために、ここで全員の作品について触れる。創作の原動力動機はだれかが、自分の作品を見ていてくれるか。誉めてくれるか、貶してくれるか。つまり無視されていないことが重要。そう思ってもらえるようにやっている。後藤比奈夫先生が句評は淡々と短くというようなことを書いておられる。実能的を射た言であるが、ここでは普通の評を書かない。句会で賑やかに遣り取りするように書いて行く。中には関西弁も伊予弁も登場する。余計なことも書く。自然のごとく六花では今新しい芽が出ようとしている。六花は春を迎えているのだ。ベテランは例えが悪いが、立派な古木に梅や桜が咲くように、美しい花を咲かせてくれている。この間亡くなった船村徹さんの弟子鳥羽一郎が「兄弟船」の一節をどうしても楽譜通りに歌えなかった。すると船村さんは「いい、お前の歌える通りに楽譜を直す」と言ったという器の大きい人だった。主宰もそうありたい。楽譜を直させる人はあなた。

口数のへたつてきたる日向ぼこ 藤生不二男

「へたる」というのはへたばつて座り込むという意味だが、借金を踏み倒すこともいうらしい。だが句意は言葉に明確さを失いへなへなとなること。年寄りに日向ボコは薬物中毒に近い。中には涎まで垂らす人も。そのまま大往生となればこれほど申し分ないことだ。死因は心不全（どうして脳不全でないかは知らない）。しかしこのような幸せな死に方はなかなか出来ることではない、という医者座談会をラジオで聞いた。また「私の死亡記事」というのを文藝春秋が以前出版した。その一〇二名のうち俳人だけがもつともまじめでツマラン（ただしその俳人が嫌いどころ書いたのではない）だった。何時も例に引くが山田風太郎「人間臨終図鑑」（上・下）では、直木三十五などの壮絶な死に方を勉強できるから、参考までに推薦しておく。しかし風太郎先生の最期がどうだったのか書いてなかったのがツマラン！。



六花集



弥生 到着順

延川五十昭

三線の島歌聞ゆ年の暮
持ち歌はいつも一つの年忘れ
人波を眺める窓べ年の暮
甘樫の麓に若菜つみにけり
七草の粥を啜れば野の香り

善野 焔

寒鏡伯母の手に疏く祖母の髪
寒潮を見やりて丘を去りがたし
明石崎寒ざむ灯り夕間暮
凧のしんにさびしきとき止みぬ
忘年や上手に酔うて帰るべし

大内 幸子

小豆飯己が朔日祝ひけり
ふり返り花終の匂ひかな
枝先に塵かと思ふ返り花
通院にボタン飛ばして十二月
書きよくて一年用の日記買ふ

江見 巖

初暦反りに任せる生活かな
宝船私も一緒に乗せてつて
新年や相レ不変といふ俳句
舫ひ船ぴんと張りたる松の内
介護者も仲間に入る福笑

小林はじめ

残雪の遠山光る晴間かな
幻月を宿せし梢霜の声
薄氷の棚の模様みやびかな
メニュー札お国言葉でおでんかな
頬被り中は模様の皺深し

森山あつ子

寒空にまだら染めつつ散る紅葉
暮ゆきしべつこう色や柿臙
侘助を荅の内に頼みおき
立ち昇る湯気白きかな年の暮
一人住む一つの灯りクリスマス